科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））中間評価

課題番号	19H05593	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和５(2023)年度
研究課題名	東アジアにおける農耕の拡散・変容と牧畜社会生成過程の総合的研究	研究代表者 （所属・職） （令和３年３月現在）	宮本　一夫 （九州大学・人文科学研究院・教授）

【令和３(2021)年度　中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A－	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、 一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（研究の概要）

本研究は、中国大陸部において発生した農耕が、東北アジアへと拡散し、変容していく過程を明らかにするばかりでなく、その拡散と北アジアにおける牧畜民社会の成立との関係について考古学的に追究することを目的としている。

（意見等）

本研究は、中国大陸部から東北アジアや日本への農耕の拡散・変容過程、並びに北アジアの牧畜社会の成立過程を探る重要な研究であり、新型コロナウイルス感染症の影響による現地調査の延期以外は、幾つかの重要な研究の進展が認められる。

東北アジアへの農耕の拡散過程については、中国山東省の煙台市大仲家遺跡出土の土器を用いた圧痕分析により、これまで想定されていた以上に古い、紀元前４０００年頃のイネの到来を提示することに成功した。また、朝鮮半島南部から北部九州への農耕の拡散についても、過去の発掘資料を再分析し、紀元前９～８世紀に熱帯ジャポニカが到来し、続いて紀元前７～６世紀に温帯ジャポニカが導入されたという段階的な伝播過程を明らかにした。

こうした資料の再調査は、海外調査が困難な状況下にありながらも、全体の課題に沿う形で研究を組み直した結果であり、その柔軟な対応は評価できる。

さらに北アジアにおける牧畜社会の成立については、モンゴル国アブダライ遺跡における方形敷石墓より出土した人骨や現地研究機関が収蔵する人骨を対象に、自然人類学的分析、ストロンチウム同位体比分析を行い、ユーラシア草原地帯西部からの牧畜民の移動が関与している点を導き出した。北アジアの牧畜社会の成立について、ある程度の見通しが得られたと言える。

以上のように、新型コロナウイルス感染症の影響下において、実施可能な研究を見極め、それらを着実に進めていると評価する。